

### 情報の評価とコレクション形成

日本図書館情報学会研究委員会／編

勉誠出版

2015/10 176p 19cm 1,800円(税別)

ISBN : 978-4-585-20502-9

「わかる！図書館情報学シリーズ」の一巻として刊行された本書は、『記録と史料』誌

での紹介にはそぐわないようにみえるかもしれない。しかし本書は、「文書資料と文書館・アーカイブズ」という章を収録している。図書館情報学の概説書にこのような章が設けられるようになったのは、いかなる理由によるものだろうか。

本書は、図書館界で従来「選書」「蔵書構築」という用語で呼びならわされてきた業務について主に論じている。だが、この本のやや抽象的な書名だけを見ると、「情報の評価」と「コレクション形成」の間にはどのような関係があるのか、直ちに理解しにくいかもしれない。

だがアーカイブズの場合は、資料・情報の「評価」と文書館の所蔵資料（コレクション）形成の間に密接な関係があることは明白である。親機関が生み出した文書のうち、「評価選別」を経て移管されたものが文書館の所蔵資料を形成するという考え方は、関係者の間では広く受け入れられている（現実にはどのくらい実行されているかは別として）。また、親機関からの移管文書以外（寄贈・寄託される資料や、古書店等から購入する資料など）の場合も、寄贈・寄託を受けるに値するかの調査や購入価格の査定といった形で、一定の「評価」が行われるのが通例である。この意味の評価は、博物館・美術館などでも同様に行われているだろう。本書はアーカイブズを含む多様な情報資源を広く視野に収めた上で「情報の評価とコレクション形成」を論じた本であり、それゆえに、アーカイブズの評価選別を一段深く考えるためのヒントをいくつも見出すことができる。

本書の構成は以下の通りである。

## 第1部 情報の評価

- 第1章 利用者の視点にもとづく情報と情報源の評価（齋藤泰則）
- 第2章 学術情報の評価（小野寺夏生）
- 第3章 ウェブ情報源の評価（佐藤翔）
- 第4章 蔵書の評価と資料選択（大場博幸）

## 第2部 コレクション形成

- 第1章 コレクションとは（安井一徳）

- 第2章 日本の図書館のコレクションの現状（大谷康晴）
- 第3章 学校図書館のコレクション形成（河西由美子）
- 第4章 大学図書館のコレクション（佐藤義則）
- 第5章 文書資料と文書館・アーカイブズ（古賀崇）

まず第1部「情報の評価」の第1章は、情報を評価する際の指標について論じ、全ての情報・情報源に共通する信頼性と、個々の利用者にとっての適合性の両面があることを指摘する。アメリカの大学生に対する調査によれば、情報源を選択・評価する基準として迅速性と利便性を重視しており、ウェブ情報源を図書館の情報源と同等あるいはそれ以上に信頼していたという。このような傾向は日本にも適合すると思われるため、利用者へのレファレンス・サービスにあたっては、それを前提に各種情報源の特徴を説明する必要がある。

次に第2章は、学術雑誌の論文等の評価に用いられる方法について概説する。論文の被引用回数を集計する方法などに加え、近年はソーシャルメディア等での言及をもとに評価する方法も提案されているという。比較的知られている「インパクトファクター」は雑誌の評価に用いるものであり、論文や研究者個人の評価に使うのは誤りであることを指摘する。

第3章は、今日の日常生活において最も重要な情報源となったウェブ情報源の評価について取り上げる。評価の観点として信憑性、安定性、評判、依拠可能性を挙げ、各種のウェブ情報源に即して具体的に論じている。冊子体の百科事典とウィキペディアの記事の正確性を比較した調査結果や、図書館員によるレファレンス・サービスとQ&Aサイト（「Yahoo!知恵袋」など）では正答率に大きな差はなかったとする研究成果は興味深い。

第4章は、図書館の蔵書の評価とその選択のあり方（選書）をめぐるこれまでの議論を整理している。資料選択において資料の質を

重視する「価値論」と利用者の需要を重視する「要求論」の対立に加え、近年の「無料貸本屋論争」についても論じる。図書館が「アーカイブ」的役割を果たすことについても言及するが、既存の蔵書評価の方法は網羅性や保存性を肯定的に評価する観点の有していないため、「単年度の利用量評価が主流である図書館は、アーカイブ的役割と相容れない面がある」(75頁)としている。

第2部「コレクション形成」の第1章は、コレクションの形成・管理に関する総論である。そもそもコレクションには「主題やテーマがある」「本来の用途で使用されず、保存され、顕示される」という2つの共通する性質があるとする。図書館がコレクションを持つことの意義・役割として、資料へのアクセスに要するコストの削減、利用者が図書館に寄せる「期待」の形成、図書館や設置母体の「象徴」という3点を挙げるが、これらは図書館の設立目的や資料収集の意義とも相通じる面が大きい。

第2章は、国立国会図書館と全国の公共図書館・大学図書館が日本で出版される書籍をどのくらい所蔵しているかについて、大規模統計調査をもとに概観している。図書館は偏った選書を行っているのではないかとの疑念に対し、国会図書館と公共図書館は日本の出版状況にある程度忠実に切り取った形で資料を収集していたと分析し、コレクション形成をめぐる議論は実証的データに基づいて行うべきことを指摘する。

第3章は、学校図書館がどの程度の蔵書を有するべきかについて、文部科学省や全国学校図書館協議会が定めた基準を紹介しつつ、実際はこれを満たさない学校が少なくない現状を指摘する。とはいえ、全国団体等が学校の規模に応じた最低基準冊数や蔵書の分野別配分比率を提示している点は、学校図書館と同様に整備が進んでいない文書館界でも参考にできるかもしれない。

第4章は、大学図書館のコレクションについて、特に電子ジャーナル等の普及により自

機関でコレクションを所蔵せずにライセンス契約を結ぶ形となりつつある動向を取り上げる。電子ジャーナル等の場合、これまで図書館が果たしてきた資料保存機能をいかに担保するかが課題となるが、その対策として、何らかの事由により出版者からの提供が行えなくなった場合に備えてデータを保存する「ダークアーカイブ」の取り組みに言及している。

最後に、古賀崇氏の執筆による第5章は、文書館等における「文書資料」の評価や受け入れ・整理等の特徴について、図書館関係者向けに分かりやすく解説している。まず組織アーカイブズと収集アーカイブズの違いを述べた上で、前者についてはレコード・スケジュールやライフサイクルの考え方を前提に「評価選別」がなされることを論じる。いずれの場合も、文書資料には出所原則や原秩序尊重の原則に基づく整理・記述が必要であることを説明する。最後に、ウェブ情報の保存についてはアーカイブズの評価選別の方法論が参考になりうること、一次資料の整理法の理解は情報リテラシーの幅を広げうるものであることを指摘している。

近年の図書館情報学は、図書や逐次刊行物といった従来型資料を、図書館という施設の中でどのように取り扱うかという枠組みを越えて(それらも依然として重要な課題だが)、人間が多種多様な情報をどのように生産し、評価し、探索し、利用しているかを包括的に分析する方向へと拡大を遂げてきた。図書館における所蔵資料の選択・収集も、そのような広範な枠組みの中に位置づけることができる。この方向性は、現用文書の作成・管理とアーカイブズの双方を総合的に把握する「文書のライフサイクル」あるいは「レコードキープ」の考え方にも通底するものがあるだろう。「情報の評価とコレクション形成」という本書のテーマは、文書館や博物館も含めた広い視座からとらえた時に、ますますその真価を発揮するのではないだろうか。

京都大学大学文書館 坂口貴弘